臨床分離株のニューキノロン耐性菌、多剤耐性菌の経年的推移に関する検討
II. グラム陰性桿菌その1

出口 浩 ・横田のぞみ・古口 昌美 中 根 - 豊・福島よし子・深山 成美 石原 理加

東京総合臨床検査センター研究部\*

小田 清次・田中 節子・佐藤久美子 同 検査第II部

(平成2年4月23日受付・平成2年6月8日受理)

1985 年分離株、1988 年分離株の Escherichia coli, Klebsiella pneumoniae, Proteus mirabilis, そして Haemophilus influenzae, いわゆる 4 major GNR 350 株の感受性 (MIC) 測定成績の比較から、次の結論を得た。

- 1. ニューキノロン耐性が出現してきた菌種は、E. coli, K. pneumoniae であるが、E. coli のニューキノロン耐性株の多くは、外来を受診した婦人の急性単純性尿路感染症由来株であることから、市中感染症レベルにおいて、ニューキノロン耐性菌が増加することを示唆していた。
- 2. E. coli の cephems 耐性が増加しており、E. coli の多剤耐性が、増加することが危惧される。
  - 3. P. mirabilis, H. influenzae のニューキノロン耐性株は認められない。
  - 4. H. influenzae の β-ラクタマーゼ産生株の経年的増加傾向は認められない。

Key words: 臨床分離大腸菌のニューキノロン耐性菌, 多剤耐性大腸菌の経年的推移

本稿では Escherichia coli, Klebsiella pneumoniae, Proteus mirabilis, そして Haemophilus influenzae, いわゆる 4 major GNR の成績を報告する。

## I. 検 討 方 法

本検討報告の I. に詳細を記載した1)。

### II. 成 細

Tables  $1{\sim}4$  に E. coli, K. pneumoniae, P. mirabilis, H. influenzae に対する 9 薬剤の MIC-range, MIC $_{50}$  (50 % MIC), MIC $_{80}$  (80 % MIC), MIC $_{90}$  (90 % MIC) を, Table 5 に new-QLs に対する I 株, R 株の経年的な割合を, そして Table 6 に E. coli の耐性パターンの経年的比較を示した。

# 1. E. coli

New-QLs 4 薬剤の MIC-range の最小値は, 1985 年分離株に比較して 1988 年分離株にも変化はないが,最大値が大幅に上昇しており、4 薬剤の MIC‰が共通して上昇した。Table 5 に示したように、1985 年分離株には enoxacin (ENX) に I 株が 2 % (1 株) 認められ

るだけであるが、1988年分離株には 4 薬剤に対する I 株と R 株が合わせて 10 % (ENX は 12 %) 認められる。これら new-QLs 4 薬剤に対して、共通に I または R を示した 5 株中の 4 株は、婦人の急性単純性尿路感染症由来である。

 $\beta$ -ラクタム系 4 薬剤の MIC-range の最小値に変化はないが、sultamicillin (SBTPC)、cefaclor (CCL)、そして cefteram (CFTM) の最大値が大幅に上昇しており、これに伴い MIC<sub>80</sub>、MIC<sub>90</sub>に、経年的な変化が認められる。

Table 6 は、1985 年分離株、1988 年分離株の耐性パターンである。これでみると1985 年分離株は、ampicillin (ABPC) 耐性の割合が高く、耐性パターンは1~6分類で比較的単純であるが、1988 年分離株には前述の new-QLs に対する I 株と R 株、SBTPC に対する R 株、さらに CFTM に対する I 株が登場しており、CCL に対する R 株も増加している。この結果耐性パターンは1~16 分類となり、複雑な様相を示した。

Table 1. Susceptibility distribution of clinical isolates of E, coil

0	Year of	No. of strains	A 4 ! b . ! 4 !			MIC (µg/ml)	
Organism	isolated		Antibiotic	Range	50°a	80° <sub>0</sub>	90%
			PPA	0.78 ~ 25	1.56	3.13	3.1
			NFLX	5.0.025 0.78	0.05	0.1	0.1
			OFLX	5-0-025 0.78	0.05	0.1	0.1
			ENX	0.05 ~ 3.13	0.1	0.39	0.3
	1985	50	CPFX	50 025 0 2	≤0.025	0.05	0.0
			ABPC	1.56 ~>100	3.13	>100	>100
			SBTPC	1.56 ~ 25	3,13	6.25	12.5
			CCL	1.56 ~ 50	6.25	12.5	25
Escherichia coli			CFTM	0.1 ~ 1.56	0.2	0.39	0.3
Escucricula con			PPA	0.78 ~>100	1.56	3.13	50
			NFLX	≥ 0.025 ~ > 100	0.05	0.2	6.2
			OFLX	≤0.025~ 50	0.05	0.2	3.1
			ENX	0.05 ~>100	0.1	0.39	12.5
	1988	50	CPFX	≦0.025~ 25	≤0.025	0.05	3.1
			ABPC	1.56 ~>100	50	> 100	>100
			SBTPC	1.56 ~ 100	6.25	25	25
			CCL	1.56 ~>100	6.25	>100	>100
			CFTM	0.1 ~ 12 5	0.2	3.13	6.2

Table 2. Susceptibility distribution of clinical isolates of K. pneumoniae

0	Year of	No. of strains	Antibiotic	Downs	MIC (µg/ml)			
Organism	isolated			Range	50%	80%	90%	
			PPA	1.56 ~ 50	3.13	3.13	6.25	
			NFLX	≤ 0.025~ 3.13	0.1	0.2	0.2	
			OFLX	≤ 0.025~ 1.56	0.05	0.1	0.2	
			ENX	0.1 ~ 6.25	0.2	0.39	0.78	
	1985	50	CPFX	<b>≤</b> 0.025~ 0.78	≦0.025	0.05	0.05	
			ABPC	12.5 ~>100	100	>100	>100	
			SBTPC	0.78 ~ 50	3.13	6.25	12.5	
			CCL	0.78 ~ 25	1.56	3.13	3.13	
VIII.			CFTM	≤ 0.025~ 0.39	0.05	0.1	0.2	
Klebsiella pneumoniae			PPA	1.56 ~>100	3.13	6.25	12.5	
			NFLX	≤ 0.025~ 12.5	0.1	0.2	0.78	
			OFLX	≤ 0.025~ 6.25	0.1	0.1	0.78	
			ENX	0.1 ~ 50	0.2	0.78	1.56	
	1988	50	CPFX	≤ 0.025~ 6.25	0.05	0.1	0.2	
			ABPC	25 ~>100	>100	>100	>100	
			SBTPC	1,56 ~>100	6.25	12.5	25	
			CCL	0.78 ~ 25	1.56	3.13	6.25	
			CFTM	≤ 0.025~ 0.39	0.05	0.1	0.2	

Table 3. Susceptibility distribution of clinical isolates of P mirabilis

	Year of isolated	No. of		-	MIC (μg/ml)			
Organism		strains	Antibiotic	Range	50%	80%	90%	
			PPA	1.56 ~ 6.25	3.13	3.13	6.25	
			NFLX	≤0.025~ 0.2	≤0.025	0.05	0.05	
			OFLX	≤0.025~ 0.1	0.05	0.05	0.1	
			ENX	≤0.025~ 0.39	0.1	0.2	0.2	
	1985	25	CPFX	≤0.025~ 0.05	≤0.025	≤0.025	<b>≤</b> 0.025	
			ABPC	0.78 ~>100	1 56	>100	>100	
			SBTPC	1.56 ~ 12.5	3.13	6.25	6.25	
			CCL	0.78 ~ 12.5	1.56	3.13	6.25	
			CFTM	≤0.025~ 0.1	≤0.025	0.05	0.05	
Proteus mirabilis			PPA	1.56 ~ 6.25	3.13	3.13	6.25	
			NFLX	≤0.025~ 0.1	≤0.025	0.05	0.05	
			OFLX	≤0.025~ 0.1	≤0.025	0.05	0.05	
			ENX	≤0.025~ 0.2	0.05	0.1	0.1	
	1988	25	CPFX	≤0.025~ 0.05	≤0.025	≤0.025	≤0.025	
			ABPC	0.78 ~>100	1.56	100	>100	
			SBTPC	0.78 ~ 12.5	3.13	3.13	6.25	
			CCL	0.78 ~ 12.5	1.56	3.13	3.13	
			CFTM	≤0.025~ 0.1	≤0.025	≤ 0.025	0.05	

Table 4. Susceptibility distribution of clinical isolates of H. influenzae

0	Year of	No. of strains	Antibiotic	P	MIC (μg/ml)				
Organism	isolated		Antibiotic	Range	50%	80%	90%		
			PPA	1.56 ~ 12.5	6.25	12.5	12.5		
			NFLX	≦0.025~ 0.05	≦0.025	≤0.025	0.05		
			OFLX	≦0.025~ 0.1	≤0.025	≤0.025	0.05		
			ENX	≦0.025~ 0.2	0.05	0.05	0.1		
	1985	50	CPFX	≦0.025~ 0.05	≦0.025	≦0.025	≤0.025		
			ABPC	0.1 ~>100	0.39	12.5	>100		
			SBTPC	0.2 ~ 3.13	0.78	1.56	1.56		
			CCL	0.78 ~ 25	3.13	6.25	12.5		
11 11 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1			CFTM	≦0.025~ 0.2	≦0.025	0.05	0.05		
Haemophilus influenzae			PPA	1.56 ~ 12.5	6.25	6.25	12.5		
			NFLX	≦0.025~ 0.39	≦0.025	≤0.025	0.05		
			OFLX	≦0.025~ 0.2	≦0.025	≤0.025	0.05		
			ENX	≦0.025~ 0.78	≦0.025	≦0.025	0.1		
	1988	50	CPFX	≤0.025~ 0.2	≦0.025	≤0.025	≤0.025		
			ABPC	0.1 ~>100	0.39	12.5	100		
			SBTPC	0.2 ~ 6.25	0.39	0.78	1.56		
			CCL	0.78 ~>100	3.13	6.25	12.5		
			CFTM	≤0.025~ 0.39	≦0.025	≤0.025	0.05		

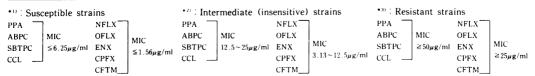
Table 5	Annual	comparison b	atwaan	etraine o	f four	major	CINIR	inconcitivo	and register	nt to new	quinolones
i abie J.	Aimiua	i combanson b	etween	strains o	i ioui	maior	UNIV	misensitive a	and resista	ii to new	quinoiones

Oranism	Year of	No. of	NF	NFLX		OFLX		ENX		CPFX	
Oranism	isolated	strains	1•11	R*25	ı	R	ı	R	1	R	
Escherichia coli	1985	50	0.31	0.3)	0	0	2	0	0	Ü	
Escherichia con	1988	50	2	8	6	4	4	8	6	4	
Klebsiella pneumoniae	1985	50	2	0	0	0	2	0	0	0	
Kieosietia pneumoniae	1988	50	8	0	6	0	2	6	6	0	
Proteus mirabilis	1985	25	0	0	0	0	0	0	0	0	
rroleus mirabilis	1988	25	0	0	0	0	0	0	0	0	
Hamakkilua influence	1985	50	0	0	0	0	0	0	0	0	
Haemophilus influenzae	1988	50	0	0	0	0	0	0	0	0	

 $<sup>^{\</sup>circ}$ 1) : Intermediate (insensitive new quinolones) MIC 3.13 $\sim$ 12.5  $\mu g/ml$ 

Table 6. Annual change in resistance patterns of Escherichia coli

Year of	No. of		Antibiotic											
isolation	strains	PPA	NFLX	OFLX	ENX	CPFX	ABPC	SBTPC	CCL	CFTM	pattern			
	3	S*1)	S	S	S	S	R*3)	S	S	S	1			
	2	S	S	S	S	S	R	[ • 2)	S	s	2			
1985	3	S	S	S	S	S	R	S	I	S	3			
1903	5	S	S	S	S	S	R	I	I	S	4			
	2	S	S	S	S	S	R	I	R	S	5			
	1	I	s	s	I	s	S	S	S	S	6			
	2	S	S	S	S	S	R	S	S	S	1			
	1	S	S	S	S	S	R	I	S	S	2			
	2	S	S	S	S	S	R	R	S	S	3			
	2	S	S	S	S	S	R	I	I	S	4			
	4	S	S	S	S	S	R	I	R	S	5			
	1	S	S	S	S	S	R	R	I	S	6			
	2	S	S	S	S	S	R	S	R	S	7			
1988	7	S	S	S	S	s	R	I	R	I	8			
1900	2	S	S	S	S	S	R	R	R	I	9			
	1	I	S	S	S	S	R	S	S	S	10			
	1	I	S	s	I	S	R	I	R	S	11			
	1	R	I	I	I	I	R	I	R	S	12			
	1	R	R	I	R	I	S	S	S	S	13			
	1	R	R	I	R	R	S	S	S	S	14			
	1	R	R	R	R	I	R	I	R	I	15			
	1	R	R	R	R	R	S	S	S	S	16			



<sup>•20 :</sup> Resistant (new quinolones) MIC ≥25 μg/ml

<sup>•3) :</sup> Percentage (%)

1988 年に分離した *E. coli* は、new QLs 耐性に加えて cephems 耐性の増加傾向を示唆していた。

# 2. K. pneumoniae

New QLs 4 薬剤の MIC range の最小値には、経年的な変化はないか、最大値が 2~3 管 (4~8 倍) 高値へと移行しており、これに伴い 4 薬剤の MIC mが共通して上昇した。これらは、ENX に対しては R 株が存在するが、他の 3 薬剤に対しては I 株であり、由来はいずれも慢性気道系感染症由来株である。

 $oldsymbol{eta}$ :  $oldsymbol{eta}$ :  $oldsymbol{eta}$ :  $oldsymbol{eta}$   $oldsymbol{eta}$ :  $oldsymbol{eta}$ : ol

#### 3. P. mirabilis

検討した 9 **薬剤**の MIC-range に、経年的な変化は 認められない。

# 4. H. influenzae

New-QLs 4 薬剤の MIC-range の最小値には, 経年的な変化はないが、最大値が 1~3 管 (2~8 倍) 高値へと移行しているが、new-QLs 4 薬剤に対する I または R 株は、1988 年分離株でも認められない。

 $\beta$ -ラクタム系 4 薬剤の MIC-range は、SBTPC が 1 管 (2 倍)、CCL が 3 管 (8 倍)、そして CFTM が 1 管 (2 倍) 高値へと移行しているが、MIC $_{90}$ に経年的な変化は少なく、H. influenzae の  $\beta$ -ラクタマーゼ産生株の、経年的な増加傾向は認められない。

#### Ⅲ. 考 察

1985 年分離株に比較して, 1988 年分離株の耐性菌の特徴は、new-QLs 耐性株が *E. coli*, *K. pneumoniae* に登場したこと、そして *E. coli* の cephems 耐性の増加を挙げることができる。

1987 年以降の自験例を順を追ってみると、new-QLs 耐性  $E.\ coli$  (I 株と R 株) が出現したのは、1988 年後半と考えられる。1987 年後半 (7 月~12 月) に分離した 入院 患 者 由 来  $E.\ coli$  に 対 す る norfloxacin (NFLX)、ofloxacin (OFLX) の MIC $_{100}$  (100 % MIC) は、各々 $\le 0.39\ \mu g/ml^2$ 、1988 年前半(1 月~5 月)に分離した外来患者由来  $E.\ coli$  に対する OFLX の MIC $_{100}$ は  $0.78\ \mu g/ml$  であり、本稿で取り挙げている I 株、R 株は、この時期には認められない $^{30}$ 。しかし、上述の 1988 年前半に分離した  $E.\ coli$  に対する OFLX の MIC $_{50}$ と MIC $_{90}$ の差は、3 管差 (8 倍)に拡大しており、MIC 値の分布が右側の高い方に移行する傾向を、我々は指摘した $^{30}$ 。

橋本らは、new-QLs 耐性には二つのタイプがあり、 その一つは DNA gyrase の変異によるもので、それら は中等度耐性 (本稿の I 株に相当)、もう一つは透過性 の低下で porin 遺伝子の変異により生じ、これも中等 度耐性となる。そしてこれらの二つが重なると、高度耐性(本稿の R 株に相当)となるとしている。平井は、臨床分離株の new QLs 耐性機構は、DNA gyraseの耐性化が中心であり、これに膜透過性低下が加わるようなパターンが考えられるとしている。そして橋本は、1990年に発行された雑誌の座談会において、現状で検出される臨床分離株の new QLs 耐性菌は、DNA gyraseの変異によるものであると述べている。。

橋本、平井らが述べている DNA gyrase の変異による new (QLs 耐性株の MIC 値が、どの程度であるかは定かではないが、我々が 1988 年の後半に分離した E coli の new (QLs 耐性 5 株中の 2 株に対する供試 4 薬剤(NFLX、OFLX、ENX、ciprofloxacin (CPFX) の MIC 値は、各々 $\geq$ 25  $\mu$ g/ml であり、これらの 2 株が DNA gyrase の変異による機構だけの耐性と断定するためには、さらに詳細な検討が求められていることを、示唆しているものと考えられた。そこで著者らは、これら new-QLs 高度耐性 E coli の耐性機構を検討し、平井の報告を支持する成績を得たが。これらは別稿で報告する。

1988 年分離林にはさらに、cephems 耐性  $E.\ coli\ m$  高い割合に認められた。1980 年以降の自験例をみてみると、これら cephems 耐性  $E.\ coli\ t$  、1980 年代の後半から増加していることが考えられる。

1980年,1983年に分離した単純性尿路感染症由来の E. coli の CEZ に対する I 株(MIC 値 12.5 μg/ml)は 各々 4 %, R 株 (MIC 値≥50 µg/ml) は各々 0 %であ るが8,9), 1988 年前半に分離した単純性尿路感染症由来 E. coli の CCL に対する I 株 4%, R 株 16%であり3, 市中感染症レベルにおける cephems 耐性 E. coli は、 1980年代後半になって増加したことを示唆していた。 一方, 入院患者由来で尿以外の由来株も含めた 1988 年 分離株を対象とした別報では10, E. coli のセファマイ シン耐性が高い割合で認められている。上述したこと から、今後は new-QLs 耐性に cephems 耐性が加わ り、E. coli の多剤耐性化が危惧された。これらのこと から著者らは、上述の new-QLs 高度耐性株に加え、 cephems 耐性 E. coli の耐性機構を検討し、それらか ら高い β-lactamase activity などを認めているが", これらは別稿で報告する。

上述したように、cephems 耐性 *E. coli* は、セファマイシンにも耐性であるが、1987 年以降に登場したいわゆる第三世代セフェム系経口薬剤にも耐性を示す<sup>3)</sup>。 Neu は、米国においては変化した penicillin binding proteins (PBPs) を持つ *E. coli* が分離されていて、mecillinam 耐性株は PBP 2 に対して最も起こりやす いが、他の PBPs の変化は普通の臨床材料分離株にはみられない。しかし、PBPs の全体が変化するような耐性型が、 $\beta$ -ラクタマーゼに安定な薬剤の使用量が増加するに伴い、将来は問題となろうと述べている $^{11}$ 。さらに橋本は、前述の座談会において、 $\beta$ -ラクタマーゼにより安定な薬剤やニューキノロン系薬剤の使用量が増加すると、細菌の方が自ら変異しなくては対応できないため、作用点の変化や透過性の低下の耐性機構を保有する耐性菌が出現してくる。近年は臨床分離株の耐性機構が、大きな変わり目にきていると述べている $^{10}$ 。以上のことから、E. coli の new-QLs 耐性と cephems 耐性は、従来の耐性型とは機構が異なる耐性菌であることが考えられる。

#### 文 献

- 出口浩一,他9名:臨床分離株のニューキノロン耐性菌、多剤耐性菌の経年的推移に関する検討。I. グラム陽性球菌。Chemotherapy 38:1013~1019, 1990
- 2) 出口浩一,横田のぞみ,古口昌美,中根 豊,深山成美,西村由紀子,小田清次,田中節子,佐藤久美子,加藤三枝子,福本寅雄:新鮮臨床分離株に対する monobactam 系抗生物質の抗菌力。Jap. J. Anti-biotics 41:1600~1622,1988
- 3) 出口浩一, 横田のぞみ, 古口昌美, 中根 豊, 福島 よし子, 深山成美, 西村由紀子, 小田清次, 田中節 子. 佐藤久美子, 加藤三枝子, 福本寅雄: 外来患者 由来臨床分離株に対する cefteram の抗菌力。 Jap. I. Antibiotics 42: 1216~1232, 1989
- 4) 橋本 一、平井敬二、佐竹幸子:細菌感染症の化学

- 療法の現状と将来。9. 薬剤はどう改良されたか。 - 合成抗歯剤の改良ー。モダンメディア 34:71~ 81,1988
- 5) 平井敬二:キノロン(ピリドン)カルボン酸系薬剤耐性。臨床と微生物14:135~142,1987
- 6) 橋木 --: 陸談会, 病原体の耐性化防止策をめぐって(松本慶蔵 司会)。化学療法の領域6:510~524, 1990
- 7) 出口浩二、横田のぞみ、古口昌美、中根 雙、福島よし子、深山成美、西村由紀子、小田清次、岩谷芳大、千田尚人、関根敬治:臨床分離 Cephems 耐性 E. coli, CAZ 耐性 P. aeruginosa の耐性機構に関する検討。第 37 回日本化学療法学会西日本支部総会p. 108. Dec. 1989(和歌山)。
- 8) 出口浩一,深山成美,西村由紀子,西家綾子,小田 清次,佐藤慎一,松本好弘,池上亮裕,横田のぞ み,田中節子,福本寅雄:高頻度臨床分離株の主な 抗菌性物質に対する感受性。経年的推移に関する検 討 第3報。Jap. J. Antibiotics 38:1603~1618, 1985
- 9) 出口浩一:臨床分離高頻度分離菌株の主な抗菌性 物質に対する感受性。Jap. J. Antibiotics 34:1263 ~1277, 1981
- 10) 出口浩一, 横田のぞみ, 古口昌美, 中根 豊, 福島 よし子, 深山成美, 西村由紀子, 小田清次, 田中節 子, 佐藤久美子, 加藤三枝子: 新鮮分離グラム陰性 桿菌に対する Cefotetan の MIC 測定成績。 Jap. J. Antibiotics 42: 2363~2376, 1990
- 11) Neu H C: β-ラクタム系薬に対する菌の耐性-β-ラクタマーゼ、細胞壁透過性およびペニシリン結合蛋白-β-ラクタム系薬。上田-泰、清水喜八朗編、p.60~76 南江堂、1987

# YEARLY CHANGES IN RESISTANCE TO NEW QUINOLONES AND MULTIPLE DRUG-REGIMEUS IN CLINICAL ISOLATES II: GRAM-NEGATIVE BACILLI PART 1

Koichi Deguchi<sup>1)</sup>, Nozomi Yokota<sup>1)</sup>, Masami Koguchi<sup>1)</sup>, Yutaka Nakane<sup>1)</sup>, Yoshiko Fukushima<sup>1)</sup>, Shigemi Fukayama<sup>1)</sup>, Rika Ishihara<sup>1)</sup>, Seiji Oda<sup>2)</sup>, Setsuko Tanaka<sup>2)</sup> and Kumiko Sato<sup>2)</sup>

- 1): Research Section, Tokyo Clinical Research Center, 14-4 Senjunakamachi Adachi ku 120, Tokyo, Japan
- <sup>a)</sup>: Clinical Laboratory, Second Department, Tokyo Clinical Research Center (Department of Microbiology)

We determined MICs against 350 isolates of *Escherichia coli, Klebsiella pneumoniase, Proteus mirabilis* and *Haemophilus influenzae* (four species of "4 major Gram negative bacilli") collected in 1985 and 1988 the and results were as follow:

- 1. New quinolone resistant strains were shown in *E. coli* and *K. pneumoniae*. New quinolone resistant *E. coli* strains were isolated from female patients with auto-infections of the urinary tract, suggesting that new quinolone resistant strains are increasing in the setting of community acquired infections.
- 2. Cephem-resistant *E. coli* (CREC) have been increasing, and an increase in multidrug-resistant *E. coli* is a cause for concerne.
  - 3. No new quinolone resistant strains of P. mirabilis or H. influenzae were found in.
  - 4. No yearly increase in  $\beta$ -lactamase producing H. influenzae was identified.